成果の説明書

(氏名)　名和賢美	(学部)　経済学部

１　重要事項

2020 年度に最も力を注いだのは、前年度に引き続き、「論理的表現力と批判的思考力を主軸とした市民教育プログラム構築に向けた調査研究」ではあるが、関連する教育研究事業は、以下の通り、新型コロナウイルスに大いに翻弄された。

（１）初等中等教育での教育研究

附属高のＴＳＵＢＡＳＡプロジェクト事業の一環として、市内小学生を対象とした「アウトプット教室：経附生・経大生といっしょに発信力を鍛えよう」という事業を開催予定であったが、コロナ感染拡大防止の観点から、開催を断念した。

（２）高等教育での教育研究：経済学部教養教育委員会日本語部会の部会長（通年）

経済学部では、2014 年度より１年次生の批判的思考・論理的表現の汎用力の育成を目指す初年次教育科目として日本語リテラシー科目を新設開講したが、本科目の授業内容の検討や担当者の選定などを逐条審議する部会を定期的に主宰した。

特に本年度は、4 月中に遠隔授業への変更が決定されて以降、オンラインでも従来と同様の全 44 クラス標準化が実現できるように、急遽、授業内容や指導方法などの大幅改訂に尽力した。さらに、この作業中に経済学部初年次必修科目「日本語リテラシーⅠ」と地域政策学部同科目「初年次ゼミ」の一元化の企画立案にも挑んだ。その結果、第 1 回から第 5 回分までについては、両科目全 85 クラスが全 39 名の教員により同一の授業内容を同一の指導方法で実施する運びとなった。

授業開講に向けては、すでに前年度中に作成を終えていた『指導要領 2020 年度版』の大半を書き直さねばならなかった。その改訂版は、オンライン操作標準化の内容も加わったため、130 頁もの分量となった。

この『指導要領 2020 年度版』改訂版を全担当教員が使用しながら、毎回の遠隔授業は進められ、成功裏に終わることができた。両学部の教育標準化の実現は第 5 回までという限定的なものではあったが、本学初年次教育科目の一元化を推し進める大きな一歩になったのではなかろうか。

しかも、このように一元化された初年次教育科目の第 1 回においては、入学式風に授業を実施することも試みた。すなわち、開式の辞に始まり、新入生呼名、入学許可、学長式辞・学生部長祝辞（どちらもオンデマンド）、新入生誓いの言葉、そして閉式の辞という流れで、この次第の中に授業ガイダンスの内容を絡めながら、進行させたのである。こうした工夫を通じて、入学式が中止となった新入生に対して、温かく迎え入れるように努めたわけだが、新入生には授業初回のサプライズとなったはずである。

２　その他の事項

後期開講１週目から、演習科目のみならず初年次科目でも講義科目でも、担当科目すべてにおいて対面授業を再開した。これにより、学生が大学で学ぶ機会を、特に１年次生には初めてキャンパスに通学する機会を提供することができた。

３　次年度以降の計画・抱負

前年度と同一テーマが最重要課題となるが、初等中等教育での教育研究となる「アウトプット教室」事業の実施は、現状のコロナ禍では難しいと言わざるを得ない。高等教育での教育研究では、部会長を継続し日本語リテラシー科目の充実に努める。さらに、古代ギリシア研究を再開し、表現力や質問力の育成に関わる史料の読解にも着手したい。